

EPP 素性と wh 移動

宗正佳啓
(福岡工業大学)
munemasa@fit.ac.jp

キーワード：wh 移動、EPP 素性、wh 島、多重指定部、言語差異

1. 序

A バー移動は、普遍文法の本質を追究する上でとりわけ重要な現象であり、特に wh 移動及びそれに伴う付随現象に関しては、従来様々な分析が提案されてきた。最近の極小性理論に基づく分析では、素性の一致関係が移動の演算上の動機付けになっている。解釈可能な素性と解釈不可能な素性、及び EPP(Extended Projection Principle) 素性を仮定することで、A 移動と A バー移動を統一的に扱うことが可能になっている。特に、顕在的な移動に関しては EPP 素性が深く関わっている。他の移動の種類としては主要部移動があるが、A 移動と A バー移動と同列のものとして扱うかどうかは理論的問題となっている。Wh 移動においては、wh 句の移動以外に主要部移動が伴う場合があるが、こうした例に関する言語差異は統一的に扱われてはいない。

本稿は、移動を駆動する EPP 素性には2つのタイプがあり、それを仮定することで自然言語の様々な wh 疑問文のパターン、その通時的差異、さらに wh 島からの wh 句の取り出しに関する言語差異に、直接的且つ統一的説明を与えることを目的とするものである。

2. EPP 素性

普遍文法の原理の一つである EPP は、TP の指定部に義務的に顕在的な要素を要求する (Chomsky (1981, 1982)、Alexiadou and Anagnostopoulou (1998)、Holmberg (2000)、Miyagawa (2001)、Haerberli (2003)、Landau (2007)等参照)。もし、動詞が主語の項を持たない場合は、TP の指定部には虚辞(expletive)が生起する。

(1) a. *(John) hit Mary.

b. *(There) arrived a man from America.

Chomsky (1995)はこの EPP の要請を特定の素性照合に還元し、TP の指定部に義務的に顕在的な要素が生起するのは、TP の主要部の T が強い D 素性を持つからであると考えている。言語において、演算システムは、LF と PF とのインターフェイス条件として、読みとり可能な最適なものを提供する必要がある。強い素性というものは読みとり不可能な素性であるため、派生の段階で取り除く必要が出てくる。そこで、強い D 素性を持つ T は主語の VP の指定部からの移動を誘発し、TP の指定部に移動した主語と D 素性の照合を行うことで取り除き、インターフェイス条件を満たす。

Chomsky (2000, 2001)の枠組みでは、その強い D 素性は EPP 素性に変更されることになる。この EPP 素性は解釈不可能な素性 (uninterpretable feature)として考えられている。解釈不可能な素性は以前の強い素性と同じく読みとり不可能な素性であるため、インターフェイスに至る派生の途中段階で取り除かれることになる。従って、T が解釈不可能な素性である EPP 素性を持てば、主語が TP の指定部に移動し、両者の間で素性照合が行われ、その解釈不可能な素性が取り除かれる。この EPP 素性の照合に関わる T は、C や v などの核となる機能範疇 (core functional category) の一つであり、Chomsky (2000, 2001)では、EPP 素性の指定は T 以外の機能範疇にも指定される可能性が示唆されている。これらすべての核となる機能範疇は、セレクションによって完全なる ϕ 素性を持つことが可能である。T は C または V によってセレクトされ、それによって完全なる ϕ 素性を持つ。T と v は動詞の特徴を反映した要素をセレクトする。従って、もし T が EPP 素性を持つのであれば、他の核となる機能範疇も EPP 素性を持つことが可能になる。また、wh 疑問文において C に EPP 素性が指定されれば、顕在的な wh 句が CP の指定部に生起することになる。一方で、v に EPP 素性が指定されれば、アイスランド語に観察されるように、顕在的な目的語の移動 (object shift)が生じる。

このように EPP 素性は、核となる機能範疇の指定部に顕在的な要素を要求する素性であると見做される。もし、EPP 素性が核となる機能範疇に指定されなければ、その機能範疇の指定部に顕在的な要素は現れない (例えば、日本語の主語が非顕在的になる場合など)。

核となる機能範疇は、その主要部にも顕在的な要素が現れない場合がある。そこで、類推で EPP 素性には 2 種類あり、一つは投射範疇の指定部に関わる素性、もう一つとして、投射範疇の主要部に関わる素性を仮定することにする。仮に前者の EPP 素性が核となる機能範疇に指定されれば、その指定部に顕在的な要素が現れ、そうでなければそこに音声的内容を持った要素は現れない。例えば、英語では T に指定部に関する EPP 素性が指定されるので、主語が TP の指定部に具現化するが、イタリア語では T に指定部に関する EPP 素性は指定されないため、非顕在的な要素、つまり *pro* が生起する。一方、後者の EPP 素性が核となる機能範疇に指定されれば、顕在的な要素が主要部に現れ、そうでなければ、そこに音声的内容を持った要素が導入されないことになる。例えば、英語の埋め込み平叙文では、補文標識の *that* が導入される場合とそうでない場合があるが、導入される場合、C に主要部に関する EPP 素性が指定され、音声的内容を持つ *that* が導入される。しかし、主要部に関する EPP 素性が指定されなければ、音声的内容を持たない要素、つまり *null-that* が導入されることになる。¹

核となる機能範疇の主要部と指定部に現れる要素の分布に関する媒介変数的相違は、それぞれに対する EPP 素性のプラスとマイナスの値、則ち $\text{head}[\pm\text{EPP}]$ 、 $\text{Spec}[\pm\text{EPP}]$ で扱える（ $[\text{+EPP}]$ は EPP 素性が導入され、 $[\text{-EPP}]$ は導入されないことを意味する）。

(2) $\text{head}[\pm\text{EPP}]$, $\text{Spec}[\pm\text{EPP}]$

EPP 素性は、機能範疇に指定される素性と結びつき（例えば、*wh* 疑問文であれば C に指定される Q 素性と *wh* 素性）、そのプラスとマイナスの値が特定言語の言語資料に基づいて決定されることで、その言語の機能範疇の指定部及び主要部の顕在性、非顕在性に関する特徴が決定される。

この値の媒介変数の直接的帰結の一つとしては、自然言語のすべての *wh* 疑問文のパターンの説明である。指定部に対する $[\text{+EPP}]$ と $[\text{-EPP}]$ は、それぞれ相反し、*wh* 疑問文の CP の Q 素性と *wh* 素性を持つ C に $[\text{+EPP}]$ が指定されれば、CP の指定部への *wh* 移動が誘発さ

¹ EPP が対象とするのは本来なら指定部への句移動、または併合であるので、主要部移動は別の扱いとなる。しかし、ここでは主要部に関わる EPP 素性が指定された場合、主要部移動または併合が指定部の場合と同様生じると考える。

れ、[-EPP]が指定されればそれがブロックされることになる。しかし、この[±EPP]素性が個別文法によって異なった指定を受ければ、言語の類型的特徴を予測する。つまり、wh 疑問文の CP の Q 素性と wh 素性を持つ C に、指定部に対する EPP 素性として[-EPP]と指定されれば、wh 移動がない言語の体系が形成され、[+EPP]と指定されれば wh 移動を誘発する言語の体系ができあがる。同じことが wh 疑問文の CP の主要部の顕在性、非顕在性にも当てはまり、その C に主要部に対する EPP 素性が[+EPP]と指定されれば、顕在的な要素が C に具現し、[-EPP]と指定されればそうした要素は具現しない体系が形成される。

では、そうした体系の具体例を見てみよう。

(3) *English* C (Spec [+EPP], head [+EPP])

[_{CP} What did [_{TP} John buy]]?

(4) *Indonesian* C (Spec [+EPP], head [-EPP])

[_{CP} Mengapa [_{TP} dia pergi ke situ]]?

why she go to there

‘Why does she go there?’

(5) *Mandarin Chinese* C (Spec [-EPP], head [-EPP])

[_{CP} [_{TP} hufei mai-le shenme]]?

Hufei buy-Asp what

‘What did Hufei buy?’

(6) *Japanese* C (Spec [-EPP], head [+EPP])

[_{CP} [_{TP} John-ha nani-o katta] no]?]

John-Nom what-Acc bought Q-Part

‘What did John buy?’

英語の主節の wh 疑問文においては、wh 移動と主語・助動詞倒置が観察される。

(7) [_{CP} What_i did_j -C [_{TP} John _{t_j} [_{VP} buy _{t_i}]]]

Chomsky (2000)の枠組みに従うと、(7)のような文において、CP の主要部の C は解釈不可能な素性である Q 素性を持っている。また、Chomsky (2000)の仮定によると、wh 句は解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持つとされている。(7)の解釈不可能な Q 素性を持つ C は探査要素(probe)となり、それと合致(match)する wh 句を探し出し、その後一致を起こす。この一致により、C の解釈不可能な Q 素性と wh 句が持つ解釈不可能な wh 素性が削除されることになる。

英語においては、(7)の C には指定部に関する EPP 素性が[+EPP]と指定されているため、wh 句が CP の指定部に移動することで、この素性が満たされる。また、この C には主要部に関する EPP 素性が[+EPP]と指定されているため、それを満たすために、助動詞が T-to-C 移動によって C に移動する。² 他のゲルマン系の言語においても wh 移動が観察されるが、英語に見られる助動詞 do の移動はなく、動詞の移動によって C が顕在的な要素で埋められる、いわゆる V2 現象が観察される(cf. Roberts and Roussou (2002))。³

SVO 言語であるインドネシア語は、英語と同じく wh 移動を起こす言語であるが、助動詞または動詞の C への移動はない。これは、この言語では、疑問文の C には主要部に関する EPP 素性が[-EPP]と指定されているためである。もし、疑問文の C に主要部及び指定部に関する EPP 素性が[-EPP]と指定されるとすれば、wh 移動もなく、C に全く顕在的な要素が生起しないことになる。そうした言語に Mandarin Chinese がある。この言語では、(5)のように wh 移動も C に顕在的な要素も生起しないが、解釈不可能な Q 素性を持つ非顕在的な C が、解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持つ wh 句と一致を起こし、これによって両者の解釈不可能な素性が削除され、文全体が wh 疑問文としてライセンスされることになる。また、

² 英語においては、主節の wh 疑問文の C には、主要部に関する EPP 素性も[+EPP]と指定され、助動詞の T-to-C 移動が生じるが、主語の wh 移動の場合は助動詞 do の移動はない。しかし、その疑問文が強調の読みを持つ場合、do が生起する。平叙文において強調の読みが入る場合 do が生起するが、この do は T の位置にある。

(i) [_{TP} John did [_{VP} buy the carpet]]

(ii) a. * [_{CP} Who_i [_{TP} t_i did [_{VP} buy the carpet]]]? (no emphatic reading)

b. [_{CP} Who_i [_{TP} t_i did [_{VP} buy the carpet]]]? (emphatic reading)

これと同様に主語の wh 移動が生じた場合も、強調の読みがある場合 do は T の位置に留まっていると考えられる。しかし、強調の読みが加わらないのであれば、do は不必要である。強調の読みを含む表示を生成する意図がないのに do を導入すれば、意味の食い違いが生じ、完全解釈の原理に抵触する。従って、主語の wh 疑問文で強調の意味を持たない純粋な wh 疑問文では、do は不必要であり、do の導入はない。

³ 言語の中には、疑問文中の C が持つ主要部に関する[+EPP]素性が英語の補文標識の that 相当するものによって満たされるものがある。Quebec French、Italian Romagnolo dialect、Irish、Colloquial Moroccan Arabic、Egyptian Arabic などがそうである。

日本語は Mandarin Chinese と同じく wh 移動を誘発しない言語である。しかし、疑問文の C に主要部に関する EPP 素性が [+EPP] と指定されているため、疑問不変化詞(question particle)が併合、あるいは Hagstrom (1998)が分析するように移動によって CP の主要部に導入される (cf. Watanabe (1992)、Miyagawa (2001))。⁴

EPP 素性の指定は、同一の言語においても安定しているわけではない。例えば、言語習得のそれぞれ段階で異なった疑問文のパターンが観察される。⁵ 英語を習得している子供は生後 20～24ヶ月たつと、単一の語だけでなく複数の語を統語的に組み合わせて発話を行うようになる。凡そこの時期より、子供は文尾に上昇調のイントネーションを加えることで yes-no 疑問文を発する。次の疑問文の習得の段階として、(8)のように Is や Are といった疑問不変化詞を文頭に付加することで yes-no 疑問文を表現する。この段階では、(9)のように wh 疑問文では主語・助動詞倒置は生じない。

(8) a. Is I can do dat? Is Ben did go dere?

b. Are you put this on me? Are this is broke?

(9) a. How dat opened?

b. What you doing?

その後、主語・助動詞倒置を伴った yes-no 疑問文や wh 疑問文を使用するようになる。子供の中には、wh 疑問文に主語・助動詞倒置を行う前に yes-no 疑問文に倒置を行い、その後 wh 疑問文に倒置を施すものもいれば、同時に両方の疑問文に倒置を施すものもいる (Weinberg (1990)参照)。

(10) a. Can you do that? Is Ben going there?

b. How the door opened? What are they doing?

その後、埋め込み疑問文を習得する時期が来ると、その疑問文中で主語・助動詞倒置を行う。

(11) a. I wonder [can I find the bottle]

b. Do you know [who is she]?

こうした埋め込み疑問文での倒置は、(11)のように英語の方言にも

⁴ この言語は主要部後尾(head final)であるため、疑問不変化詞が文尾に生じている。

⁵ 子供の言語習得の中間段階で示す疑問文に関する一連のデータは、Roeper (1990)、Inada (1997)、Inada and Imanishi (1997)、Radford (1990, 1995)などの報告によるものである。

観察される（詳細はGrimshaw (1979)、McClosky (1992)、Cheng (1991)、Weverink (1991)、Rivero (1994)、Henry (1995)など参照）。

- (12) a. Ask your father does he want his dinner.
- b. I was wondering would he come home for the Christmas.
- c. They asked who did we see.
- d. I wonder what did John think would he get.

標準英語においては、主語・助動詞倒置は主節に限定され、埋め込み疑問文では生じない。これは先程述べたように、主節のCPのCに主要部に関するEEP素性が[+EPP]と指定されているためである。また、主節のyes-no疑問文では、wh疑問文と対照的にCPの指定部に顕在的な要素が生起することはない。しかし、Radford (2004: 220)の報告によると、エリザベス朝の英語では顕在的な疑問詞 *whether* がCPの指定部に現れ、さらに主語・助動詞倒置が生じていたということである。

- (13) a. Whether had you rather lead mine eyes or eye your master's heels?

(Mrs Page, *The Merry Wives of Windsor*, III, ii)

- b. Whether dost thou profess thyself a knave or a fool?

(Lafeu, *All's Well That Ends Well*, IV, v)

この事実はエリザベス朝の英語では、主節のCPのCに指定部に関するEEP素性が[+EPP]と指定され、倒置だけでなく疑問詞の*whether*がCPの指定部に生起していたことを示唆している。しかし、現在の英語では、主節のyes-no疑問文ではCに指定部に関するEEP素性が[-EPP]に、主要部に関するEEP素性が[+EPP]と指定されるため、主語・助動詞倒置のみが生起することになる (cf. Baker (1970)、Grimshaw (1993)、Roberts (1993))。

では、なぜ子供の言語や英語の方言の埋め込み疑問文で、主語・助動詞倒置が生じるのであろうか。Lightfoot (1989, 1991)は言語習得の媒介変数を決定する際に必要な肯定的証拠(positive evidence)を見いだすためには、degree-0習得可能性(learnability)で十分であることを示唆している。このdegree-0習得可能性とは、端的に言うと主節の構造のみが、何らかのものを新たに習得する際入手可能であるということである。これに従い、ここでは、子供が埋め込み疑問文を習得する際に、degree-0習得可能性により、主節の統語構造を基に埋め込み疑問文を生成するとしてみよう。主節のwh疑問文ではCに指定部、及び主要部

に関するEEP素性が[+EPP]と指定されている。主節のyes-no疑問文では、Cに主要部に関するEEP素性が[+EPP]と指定され、指定部に関するEEP素性が[-EPP]と指定されている。子供はdegree-0習得可能性により、それらと同じ値を埋め込み疑問文にも適用し、従って埋め込み疑問文にも主語・助動詞倒置が生じるのであろう。⁶しかし、標準英語の大人の文法では埋め込み疑問文に主語・助動詞倒置は生じない。⁷

(14) a. I was wondering [if/ whether [he would come home for the Christmas]].

b. I wonder [what [John bought]].

これは、子供がその後の段階で大人の文法を最終的に習得する際、埋め込み疑問文のCに主要部に関するEEP素性を[-EPP]に、指定部に関するEEP素性を[+EPP]と指定することによるものである。

以上、この節では2つのタイプのEPP素性を仮定し、疑問文のパターン、及び素性指定の変異に伴う疑問文の共時的、通時的言語差異について考察してきた。次節では、2つのタイプのEPP素性のうち指定部に関するEEP素性に焦点を絞り、多重wh疑問文、及びwh島からのwh句の取り出しに関する言語差異について考察を試みる。

⁶ 埋め込み疑問文のCの主要部に関する[+EPP]が、場合によっては助動詞以外の要素によって満たされる場合がある。前にも言及したように、Belfast Englishでは埋め込み疑問文でも主語・助動詞倒置が生じる。この方言では、助動詞の代わりに補文標識のthatを導入することがある。こうした事例は、中英語にも頻繁に観察される。

(i) a. I wondered where were they going.

b. I wonder which dish that they picked.

(Henry (1995))

⁷ ここでは、埋め込み疑問文に生じるwhetherやifは、CPの指定部に生起している点に注意。その根拠としては、中英語期には補文標識のthatの左にwhetherやifが生起し、いわゆる二重詰めCOMPを形成していたという事実である。

(i) a. I wote not whether that the length of mater acumbred you.

I know not whether that the length of stuff encumber you

(Paston Letters, 793 III. 183, OED)

b. If þat he faughte and hadde the hyer honde.

If that he fought and had her hand

(Geoffrey Chaucer, Prologue, 399, OED)

3. 多重指定部

言語の中には、複数のwh句を一度に移動させる言語がある。前節で述べたように、wh移動は指定部に関する[+EPP]素性の要請によって駆動されているとすれば、複数のwh句が移動した場合その収容先は多重指定部であることになる。指定部を複数許容するシステムの提案は、既にKuroda (1988)にある。同様の提案は、Chomsky (1995, 2000, 2001)、Koizumi (1995)、Ura (1994, 1996)においても提示されており、これらの分析では、素性照合も複数の指定部との間で成立すると主張されている。この主張に基づき、CPのCに指定部に関するEPP素性で[+EPP]が複数指定されると、それを満たす形で複数の要素が移動、またはその指定部に併合されるとしてみる。

これに関連する例としては、多重wh疑問文において複数のwh句をすべて顕在的に移動させる言語である。こうした言語にはブルガリア語、ルーマニア語、ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語等がある。ブルガリア語とルーマニア語の例としては、(15)、(16)に挙げているようなものである。

(15) *Bulgarian*

- a. Koj kŭde misliš [ce e otišŭl _ _]?
who where think-2s that has gone
- b. *Koj misliš [če e otišŭl _ kŭde]?
who think-2s that has gone where

(Rudin (1988: 450))

(16) *Romanian*

- a. Cine cui ce ziceai [că i -a promis _ _ _]?
who to whom what said-2s that to him has promised
- b. *Cine cui ziceai [că i -a promis ce _ _]?
who to whom said-2s that to him has promised what

(Rudin (1988:452))

これらの言語では、主節のCPのCに指定部に関する[+EPP]素性が複数指定され、そのため複数のwh句がその指定部に移動している。

また、これら二つの言語の特徴として、他に、wh句は幾つでも節を越えて移動できるといった特徴がある。(17)がその具体例である。

(17) a. *Romanian*

- Cine ce ziceai [_{CP} că _ iși închipuie că ai descoperit _]?

who what said-2s that to himself imagines that have-2s
discovered

b. *Bulgarian*

Koj kŭde misliš [CP če Boris iska [CP da kažeš [CP če šte
who where think-2s that Boris wants to say-2s that will
otide _ _]]]?
go-3s

(Rudin (1988: 452-456))

さらに、(18)のように、ブルガリア語とルーマニア語では、wh 島からの取り出しが認められるといった特徴がある。

(18) a. *Bulgarian*

Pentru care clauză_i vrei să afli [cine nu a decis încă
for which paragraph want-2s to learn who not has decided yet
[ce va vota t_i]]?
what will vote

b. *Romanian*

Vidjah edna kniga, kojato_i se čudja [koj znae [koj prodava t_i]]
saw-1s a book which wonder-1s who knows who sells

(Rudin (1988:457-458))

ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語も、ブルガリア語やルーマニア語と同じく、すべての wh 句が顕在的に移動する。(19)がその具体例である。ところが、これらの言語では、ブルガリア語とルーマニア語と対照的に、wh 島からの取り出しは認められないという事実がある。(20)がその具体例である。

(19) a. kto komu co według ciebie dał? (Polish)

who to whom what according to you gave
'Who gave what to whom?'

b. kodo ho kde videl je nejasné. (Czech)

who him where saw is unclear
'Who saw him where is unclear?'

c. ko mu je šta dao? (Serbo-Croatian)

who him has what given
'Who gave him what?'

(20) a. *Co on zapytał [kto wynalazł _]? (Polish)

what he asked who invented

- b. *Šta si me pitao ko može da uradi? (Serbo-Croatia)
 what have me asks who can to do
- c. *Kdo se te ptal co delá? (Czech)
 who have-3p you asked what does

(Rudin (1988: 457-460))

以上のように、ブルガリア語、ルーマニア語、ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語はすべての wh 句が顕在的に移動する点で共通点を持つが、取り出しに関して、ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語はブルガリア語とルーマニア語と違った特徴を示す。こうした違いから、以後、ブルガリア語とルーマニア語を便宜上、BR-タイプ言語と呼ぶことにし、ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語はまとめて P-タイプ言語と呼ぶことにする。

こうした二つのタイプの言語には、他にも違いが観察され、wh 句の移動先が BR-タイプ言語と P-タイプ言語とで異なっている。Rudin (1988)によると、BR-タイプ言語では、移動したすべての wh 句が、CP の主要部に位置する助動詞、または接語(clitic)に先行するということである。(21)、(22)がその具体例である。

(21) BR-タイプ言語 (*e* = auxiliary, *ti* = clitic)

- a. Koj kak ti e kazal? (Bulgarian)
 who what you has told
- b. *Koj ti e kakvo kazal?
 who you has what told

(22) a. Koj kakvo na kogo e dal? (Bulgarian)

- who what to whom has given
- b. *Koj kakvo e na kogo dal?
 who what has to whom given
- c. *Koj e kakvo na kogo dal?
 who has what to whom given

これらの例で *e* というのが助動詞で、*ti* が接語を表している。(21)、(22)の a の文では、移動したすべての wh 句が接語または助動詞の左にあるので問題ないが、b または c の文のように、すべての wh 句が接語または助動詞よりも左にないと非文になる。

一方、P-タイプ言語では、(23)から(25)に挙げてあるように、移動した wh 句のうち、1 つだけが CP の主要部にある助動詞または接語に先行し、残りの wh 句はそれらの右側にある。

(23) *Serbo-Croatian*

- a. Ko je što kome dao?
who has what to whom given
- b. *Ko što je kome dao?
who what has to whom given
- c. *Ko što kome je dao?
who what to whom has given

(24) *Polish*

- a. Koto by komu jaka napisał książkę?
who would to whom what kind write book
- b. *Koto komu by jaka napisał książkę?
who to whom would what kind write book
- c. *Koto komu jaka by napisał książkę?
who to whom what kind would write book

(25) *Czech*

- a. Kdo ho kde videl je nejasné
who him where saw is unclear
- b. *Kdo kde ho videl je nejasné
who where him saw is unclear

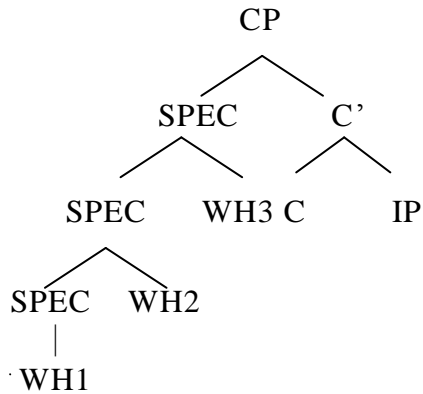
(Rudin (1988: 465-466))

以上の wh 句の移動位置を纏めると(26)のようになる。このように、二つのタイプの言語では、wh 句の移動位置に関しても異なっている。

- (26) a. [_{CP} wh wh wh [clitics] [_{IP} ...]] (BR-タイプ言語)
b. [_{CP} wh [clitic] [wh wh [...]]] (P-タイプ言語)

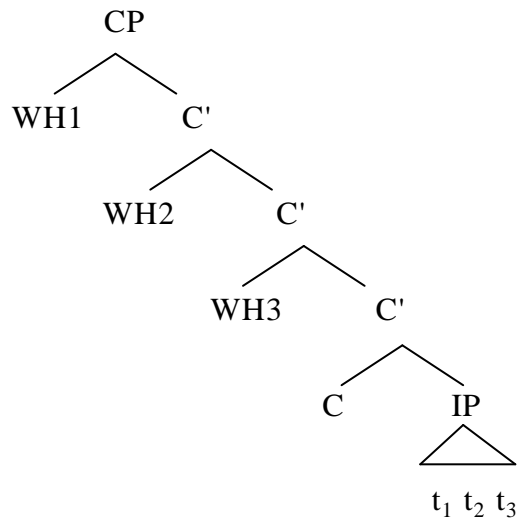
Rudin (1988)はこうした事実から、BR-タイプ言語は、(27)のような CP に複数の wh 句を収容する構造を持つと考え、P-タイプ言語では、CP には wh 句が1つだけ移動し、接語または助動詞の右側にある wh 句は IP に付加すると分析している。

(27) BR-タイプ言語



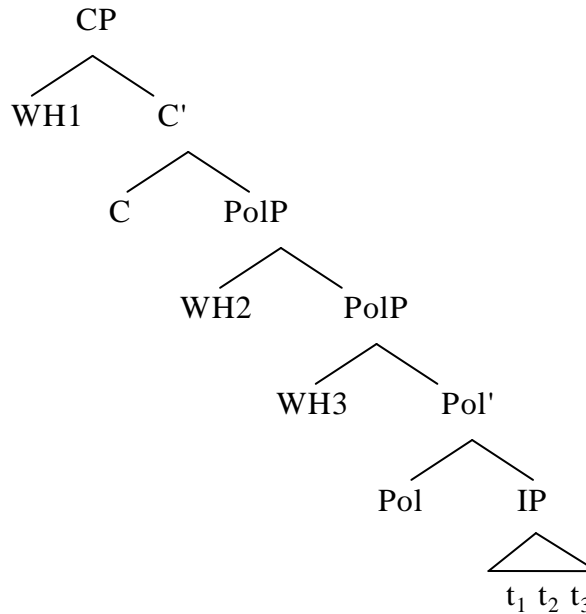
しかし、(27)は可視統語論(overt syntax)で形成される構造であるため、厳密循環条件(Strict Cycle Condition)に違反する。そこで、ここでは、BR-タイプ言語については、(28)のようにCPが多重指定部を持つ構造を想定し、P-タイプ言語では、(29)のようにCPとIPの間に複数の指定部を持つ PolP があり、1つの wh 句は CP に移動し、残りの wh 句は PolP の指定部に収容されると考える。⁸

(28) BR-タイプ言語



⁸ CP と IP の間の投射範疇に関しては Culicover (1991)、Authier (1992)、Lasnik and Saito (1992)、Koizumi (1995)、Rizzi (1997) 他様々提案されているが、用語の混乱を避けるためここでは Culicover が提案する PolP を使用している。

(29) P-タイプ言語



では、以上のことを踏まえて、なぜ BR-タイプ言語と P-タイプ言語では、英語とは対照的にすべての wh 句が顕在的に移動するのかを検討してみよう。英語では、wh 疑問文の CP の C に指定部に関する[+EPP]素性が一つだけ指定されるため、一つの wh 句が CP の指定部に移動する。多重 wh 疑問文の場合、同じく[+EPP]素性が一つだけ指定されるため、残りの wh 句は元の位置に留まる。元の位置に留まっている wh 句は、前節で述べたように、解釈不可能な wh 素性と解釈可能な Q 素性を持っている。CP の C が持つ解釈不可能な Q 素性は、元の位置にある wh 句の解釈不可能な wh 素性と解釈可能な Q 素性と一致を起し、それぞれの解釈不可能な素性が削除される。一方、BR-タイプ言語と P-タイプ言語では、指定部に関する[+EPP]素性が複数指定されるため、すべての wh 句が移動するという事実が説明される(cf. Richards (1997), Pesetsky (2000))。⁹

しかし、BR-タイプ言語と P-タイプ言語とでは、移動する wh 句の着地点に関して違いがあった。これは、機能範疇の指定部に関する[+EPP]素性の指定部位に関する相違から生じるもので、BR-タイ

⁹ ここでは、C の Q 素性と wh 句の Q 素性、及び wh 素性の照合に関しては、1 対 1 ではなく、無差別束縛(unselective binding)のように、1 対多であると考えられる(cf. Pesetsky (2000))。また、英語では、多重 wh 疑問文に関しては優位効果が観察されるが、これについては稿を改めて議論する。

プ言語では、CPのCに複数指定されるため、すべてのwh句がCPに移動することになる。

(30) [CP wh_i [c' wh_j [c' wh_k C [IP t_i t_j t_k]]]]

一方、P-タイプ言語では、CPに対しては指定部に関する[+EPP]素性が一つだけ指定され、CPとIP(TP)の間のPolPにはそれが複数指定されるため、1つのwh句がCPに移動し、残りのwh句はPolPに収容されることになる。

(31) [CP wh_i C [PolP wh_j [PolP wh_k Pol [IP t_i t_j t_k]]]]

以上、この節では指定部に関するEPP素性とその多重指定、及びそれによるwh移動の言語差異について考察してきた。この指定回数は機能範疇の指定部が複数の指定部、つまり多重指定部を持つか否かに反映されることになる。多重指定部の概念は、wh島(wh-islands)からのwh句の取り出しと密接に関連してくるため、次節では、英語のwh島の事例から始め、次にBR-タイプ言語とP-タイプ言語のwh島からの取り出しに関する言語差異に関して考察する。

4. Wh島からの取り出し

4. 1 時制の島

Wh島の中からwh句を取り出した場合、(32)に示すように文法性が低下することはよく知られている。従来の局所性に関わる理論では、これは下接の条件に抵触するためであるとされる。

(32) *What_i do you wonder [CP how_j [IP John repaired t_i t_j]]?

ところが次に示す(33)は、多くの話者にとって(32)と比較すると容認性が高く判断される。

(33) What_i do you wonder [CP how_j [IP to repair t_i t_j]]?

この事実を説明するため、Chomsky (1986)は最も深く埋め込まれた時制を持つIP(TP)が、wh移動に対し固有障壁になることを示唆しており、これに従うと、(32)では、移動がIPとCPの二つの障壁を越えたものになるため、(33)より容認性が低くなることが説明される。しかし、時制を持つIPは例外的に固有障壁になるというアド・ホックな仮定を設けなければならないという点で問題がある。さらに、こうした仮定をすると、(34)のような文を誤って排除してしまうことにもなる。

(34) a. I wonder [CP why [IP he did it t]]

b. I wonder [CP how [IP he did it t]]

つまり、(34)の文のwh句はともに付加詞であるので、移動する際には障壁に敏感になる。Chomskyが提案するように、最も深く埋め込まれた時制を持つIPが、wh移動に対し固有障壁になるのであれば、(34)の付加詞はともに障壁を越えた移動となり、すべて非文であると判断しなければならない。こうした問題の解決案は殆どない。Manzini (1992)の局所性理論に基づいた分析もあるが、経験的な問題が残る。

この節では、(32)と(33)のそれぞれの補文の統語構造に注目し、両者の文法性の相違は、それぞれの補文の構造の違いの帰結として説明できることを指摘し、それに基づいて前節で問題になった、多重wh移動を起こすにも関わらず、なぜBR-タイプ言語ではwh島からの取り出しが可能で、P-タイプ言語では不可能なのかという問題の解決を行う。

4. 2. 時制の島の構造

先ず、(32)と(33)の補文の構造の違いについて考えてみたい。(32)と(33)の補文の構造は、従来の枠組みでは、両者とも通常CPと考えられるが、(33)の補文はECM補文と、コントロール補文の統語的差異を考察するとCPの可能性がなくなる。

英語のECM補文では、ECM-verbを名詞化すると(35b)のように非文になる。

(35) a. They believe John to be intelligent.

b. *Their belief (of) John to be intelligent

英語のECM補文では補文標識が具現することはないが、イタリア語では(36)に示してあるように、補文標識を持つことが知られている。さらに、イタリア語ではこうしたECM構文の名詞化が(37)のように可能である。

(36) Italian ECM

Ritengo [CP di [IP avere sempre fatto il mio dovere]].

I believe COMP to have always done my duty

(37) la sua [[supposizione_N][CP di [PRO essere felice]]

his/ her consideration COMP to be happy

Pesetsky (1995)はこうした事実を、動詞へのゼロ接辞(zero-affix)の編入操作との関連で説明しようとしている。Pesetskyは、非頭在的な補文標識はゼロ形態素(zero-morpheme)であり、接辞として(38)のように常に動詞に編入されると考えている。さらに、英語のECM動詞の名詞化が不可能なのは、こうした動詞への編入操作が行われているためで

あると分析している。つまり、もし(35b)のようにbelieveが名詞化されると、形態は(39)のようになるが、これはゼロ派生の語に派生形態素を付けてはならないことを述べた、いわゆる、(40)のマイアーズの一般化に違反することになる。従って、(35b)のような文は排除される。

(38) They [COMP_i [believed_v] v] [CP t_i [IP John to be intelligent]]

(39) [N [v [COMP \emptyset] believe]-NOMINALIZER]

(40) Myers's Generalization

Zero derived words do not permit the affixation of further derivational morphemes [exceptions: *-er* and *-able*].

一方、イタリア語のECM補文の名詞化に関しては、補文に顕在的な補文標識が存在するので、動詞への編入操作が行われず、従って、マイアーズの一般化に違反することなく、名詞化が可能になる。こうした分析から、英語のECM補文もイタリア語と同じくCPであり、英語ではゼロ形態素がCPの主要部にあることが予測される。

次にコントロール補文について考えてみよう。コントロール補文はECM補文と異なり、(41)に示してあるように名詞化が可能で、その名詞の形態は(42)のようになると考えられる。

(41) a. Mary intended [IP PRO to leave the company]

→b. Mary's intention [IP PRO to leave the company]

(42) [[intend]-NOMINALIZER]

名詞化が可能であるということは、コントロール補文を含む文では動詞への補文標識の編入が無いことを示唆している。もし、Pesetskyの分析と同様にゼロ形態素は接辞であると考えれば、従来の分析とは異なり、コントロール補文はC-projectionを持たないことになる。

ではこのことを踏まえて、(32)の文の構造に就いて考えてみよう。(32)の補文は(43)のようにPROを含み、それがコントロールを受けるような構造となっている。

(43) What_i do you wonder [how_j [PRO to repair t_i t_j]]?

ここでの分析に従うと、(43)の補文はC-projectionを持たないことになるので、howはどの投射範疇に移動しているのかという問題が生じる。そこで、(43)の補文はCPまで投射しているのではなく、Koizumi (1995)が提案するCPとIPの間のPolPまで投射し、結果的に(43)の構造は、(44)のようになっていると考えることにする。

(44) What_i do you wonder [PolP how_j [Pol' Pol [IP to repair t_i t_j]]]

Koizumi (1995)は、補文内の統語現象の観察に基づき、Polは多重指定

部を持つ可能性を示唆しているが、このことは時制の島からの取り出しとそうでない場合との違いを説明する上で重要になるので、次に彼の分析を見てみることにする。

英語では、ある動詞の補文においては(45)、(46)のように話題化や主語・助動詞倒置が起こることはよく知られている。

(45) John said that these books, Bill put aside.

(46) a. John said that at no time would he agree to see Mary.

b. John said that under no circumstances should the dishes be put on the table.

Culicoverの報告によると、(47)に挙げてあるように、補文内での話題化は島を形成するということである。しかし、(48)のように、affective elementを前に移動して主語・助動詞倒置が生じた場合、島を形成しないということである。

(47) a. *On which table did Lee say that these books, she will put?

b. *Which books did Becky say that to Aaron, she will give?

(48) a. On which table did Lee say that only these books will she put?

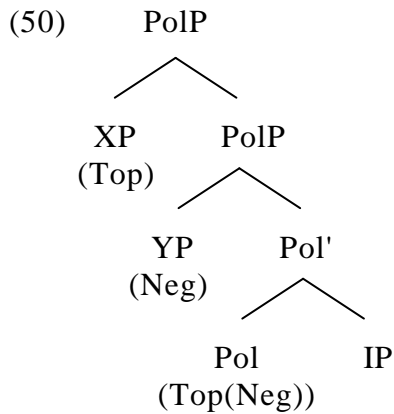
b. Which books did Becky say that only to Aaron will she give?

また、(49)に挙げてあるように、補文では話題化される要素とaffective elementを前に移動し、主語・助動詞倒置も生じる場合がある。

(49) a. Becky said that these books, only with great difficulty can she carry.

b. He said that beans, never in his life had he been able to stand.

話題化された要素の位置に関しては様々議論されてきたが、さらにこのように話題化やaffective elementの移動、そして主語・助動詞倒置が伴った統語現象が観察されると、それぞれの移動要素の着地点はどこになるのかが問題になる。Koizumi (1995)はこの問題に対し、補文のCPとIPの間にはPolPという投射範疇が存在し、さらにそれは(50)に示してあるように、二つの指定部を持つと仮定することで解決を試みている。



このPolPの主要部は、英語では二種類のNP素性を持ち、二つの指定部に入る要素はPolPの主要部と素性照合の関係を持つとされる。また、PolPの上側の指定部を彼はnon-canonical Spec（またはadjoined Spec）と呼び、そこに話題化された要素が入り、Polの持つTopic-featureと照合される。下側の指定部はcanonical Specと呼ばれ、ここに否定要素が入り、Polの持つNeg-featureと照合が行われる。そこで、この分析に従えば、(49a)のようにTopicと affective elementを移動して主語・助動詞倒置が生じた場合、その補文は(51)のような構造を持つことになる。

(51) ... [CP that [PolP these books [PolP only with great difficulty
[Pol' can [IP ...]]]]]

(51)の構造において、Polの上側の指定部にある these booksはTopic-featureと照合され、下側の指定部にある affective elementはPolの neg-featureと照合が行われている。また、前にも述べたように、こうした文にwh移動が伴うと次の(52)のように非文になる。

(52) *On which table did Becky say that these books, only with great difficulty can she put?

指定部が移動の際の着地点であるとする、(52)の文のwh句は(53)に示してあるような移動をしていることになる。つまり、wh移動によって移動したwh句は、Aバー位置である補文のPolPの二つの指定部を越え、次の可能な着地点である補文のCPの指定部を経由して、主節のCPの指定部に移動している。

(53) Wh_i ... [CP t_j' that [PolP these book [PolP only with great difficulty [Pol' can [IP ... t_i]]]

(54) Minimal Link Condition (MLC):

Minimize chain links.

PolPの下側の指定部は、補文のCPの指定部と等距離にないので、wh

移動は連鎖のリンクを最小にせよという **Minimal Link Condition (MLC)** に違反することになる。従って、派生が破綻し(52)の文は排除されることになる。

では、次に、前に言及した(55)と(56)のような文の文法性の違いについて考えてみよう。

(55) Which books did Becky say that only to Aaron will she give?

(56) *Which books did Becky say that to Aaron, she will give?

(55)のような文の派生は、(57)のようになると考えられる。

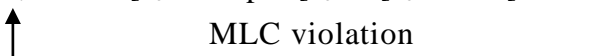
(57) Wh_i ... [CP t_i'' that [PolP t_i' [PolP only to Aaron [Pol' will [IP she ... t_i]]]]]

(57)では、wh句は補文のPolPの上の指定部を通り、次に補文のCPの指定部を経由して文頭に移動している。しかし、最初のPolPの上側の指定部への移動は、可能な着地点であるPolPの下側の指定部を飛び越えているため、MLCに抵触しているように見える。しかし、PolPの上の指定部と下の指定部はPolのMinimal Domain内にあるので、他のどの位置からも等距離にあることになる。従って、(55)はその派生を示した(57)がMLCに抵触しないため文法的と判断される。

一方、(56)の文の派生としては(58)、(59)の二つが考えられる。


(58) a. Wh_i ... [CP t_i' that [PolP to Aaron [PolP [Pol' Pol [IP she ... t_i]]]]]

b. ... [CP t_i' that [PolP Top [PolP [Pol' Pol [IP ... t_i]]]]



(59) a. Wh_i ... [CP t_i'' that [PolP to Aaron [PolP t_i' [Pol' Pol [IP she ... t_i]]]]]

b. ... [CP t_i'' that [PolP Top [PolP t_i' [Pol' Pol [IP ... t_i]]]]]



(58)では、wh句は元の位置から、可能なescape hatchである補文のPolPの指定部を越えて補文のCPの指定部に移動し、そこから文頭に移動した場合である。(59)は、一度PolPの下側の指定部に立ち寄り、PolPの上側の指定部を飛び越えて移動した場合である。これら二つの派生はこれまでの枠組みからすると、両方ともPolPの上側の指定部を越えているのでMLC違反として排除されなければならない。しかし、(60)に挙げたChomsky (1993)のMinimal Domainの定義では補文のCPの指定部とPolPの上側の指定部は、後者が前に言及したように付加的指定部

(adjoined-Spec)であるため、同じCのMinimal Domain内に入るためそうした予測ができない。

(60) Chomsky's original definition of MIN(S)

MIN(S), *S* a set of categories, is the smallest subset *K* of *S* such that for any $\gamma \in S$, some $\beta \in K$ reflexively dominates γ . (範疇の集合 *s* にとって最小の領域MIN(S)とは、*s*のどの節点 γ をとってもそれを再帰的に支配する節点 β を支配している *s*の最小部分集合*K*である。)

そこでKoizumi (1995)は(60)の定義を(61)のように部分修正している。

(61) *MIN(S)*, *S* a set of categories, is the smallest subset *K* of *S* such that for any $\gamma \in S$, some $\beta \in K$ reflexively contains γ . (範疇の集合 *s* にとって最小の領域MIN(S)とは、*s*のどの節点 γ をとってもそれを再帰的に支配する節点 β を含んでいる *s*の最小部分集合*K*である。)

(61)の定義により、補文のCPの指定部とPoIPの上側の指定部はCのMinimal Domain内になくなくなり、それら二つの指定部は他のどの位置からも等距離でなくなる。従って、(58)、(59)の派生は両方ともMLCに抵触するので、(56)のような文は排除されることになる。

以上、補文のPoIPは多重指定部を持つというKoizumi (1995)の分析を見てきたが、この分析を踏まえて問題となっている(32)、(33)の文法性の非対称性について検討していくことにする。

(32) *What_i do you wonder how_j John repaired *t_i t_j*?

(33) What_i do you wonder how_j to repair *t_i t_j*?

先ず、時制の島を形成しない(33)の構造について考えてみよう。(33)は(62)に挙げてあるように、補文はPROを含み、それがコントロールを受ける構造になっているので、CPではなくPoIPまでの投射になる。また、PoIPは多重指定部を持つため、(62)の可能な派生としては(63a)と(63b)の二つが考えられる。

(62) What_i do you wonder [_{PoIP} how_j [_{Pol' Pol} [_{IP} to repair *t_i t_j*]]]

(63) a. What_i do you wonder [_{PoIP} *t_i*' [_{PoIP} how_j [_{Pol' Pol} [_{IP} to repair *t_i t_j*]]]]

b. What_i do you wonder [_{PoIP} how_j [_{PoIP} *t_i*' [_{Pol' Pol} [_{IP} to repair *t_i t_j*]]]]

(63)では、howが先にPoIPに移動しているが、残ったwhatの移動はhowがPolの指定部に入っているが、残りの指定部を経由して文頭に移動す

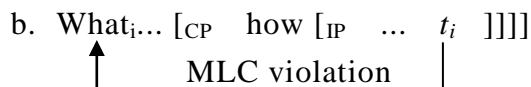
ることができる。whatのPolの指定部にある中間痕跡とhowはPolのMinimal Domainにあり、他のどの位置からも等距離になるので、MLCには抵触せず、派生は収束する。従って、(33)のような非時制節を含むwh島からの移動は容認されることになる。

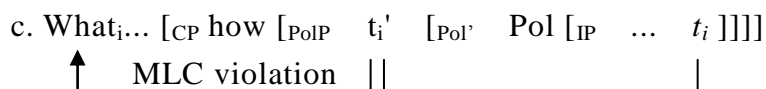
一方、(32)の補文はコントロールを受けるような構造を持たない時制節であるため、(32)の構造は従来通り(64)のようになる。

(64) What_i do you wonder [CP how_i [C' C [IP John repaired t_i t_j]]]

(64)の構造におけるwhatの移動には派生上の問題がある。(65b)に示してあるように、whatの移動は補文のCPの指定部に既にhowが入っているため、そこを飛び越えた移動となってしまう、MLCに抵触する。たとえ(65c)のように、CPとIPの間のPolPの指定部を経由したとしても、それは免れることはできない。

(65) a. *What do you wonder how John repaired?

b. What_i... [CP how [IP ... t_i]]]


c. What_i... [CP how [PolP t_i' [Pol' Pol [IP ... t_i]]]]


従って、時制節を含んだwh島からの移動は、派生が破綻し排除されることになる。

ただし、補文内のPolが、Q素性を持ち、その指定部がwh移動のターゲットになるなら、(66)のような派生も可能になる。

(66) What_i do you wonder [CP t_i' [PolP t_i' [Pol' how_j Pol [IP John repaired t_i t_j]]]

(66)においては、whatはPolの上側の指定部と、CPの指定部を経由しているのでMLC違反は起こらない。しかし、wonderは補文に、Q素性を選択するが、(66)の構造においては選択されるべきQ素性が、補文のCになく、その下のPolにあるという点で問題がある。従って、時制節を含むwh島の構造が(66)のようになる可能性はなくなる。¹⁰

¹⁰ 英語では、項の取り出しに関しては不定詞節を含むwh島からの取り出しは容認されるが、付加詞の取り出しに関しては、(ib)、(iib)に示してあるように時制節、不定詞節を問わず容認性が著しく低下する。

(i) a. *What_i do you wonder [CP how_j [IP John repaired t_i t_j]]?
 b. **How_j do you wonder [CP what_i [IP John repaired t_i t_j]]?

(ii) a. What_i do you wonder [PolIP how_j [IP to repair t_i t_j]]?
 b. **How_j do you wonder [PolIP what_j [IP to repair t_i t_j]]?

以上、時制節を含むwh島からのwh句の取り出しと、それが関わらない取り出しに見られる文法性の非対称性について考察してきた。それを簡単にまとめておく。時制節を含むwh島からwh移動が生じ、そのCPの指定部にwh句が入った後、さらにその文内からwh移動が生じれば、その移動はMLC違反を引き起こすことになる。一方、wh島が不定詞節を含む場合、その文の投射の上限はCPではなく、CPとIPの間のPolPであり、この投射範疇は多重指定部を持つため、wh移動でwh句がPolの一つの指定部に収容され、さらにwh移動がその文から生じても、Polのもう一つの指定部を経由できるので、そこがescape hatchになり派生はMLCに抵触しないことになる。

4. 3 Wh島と多重wh移動

では、前節で述べた多重wh移動を容認する言語について考えてみよう。すべてのwh句を顕在的に移動させる言語は、wh島からの取り出しが可能かそうでないかで、2つのタイプの言語に分けられたが、なぜそうした違いが生じるのかを上記の分析に基づいて説明する。

ブルガリア語とルーマニア語では、(67)に挙げてあるように、wh島からの取り出しが可能で、ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語では、(68)に挙げてあるようにwh島からの取り出しは認められない。

- (67) a. Pentru care clauz?_i vreis? afli [cine nu a decis înc?
 for which paragraph want-2s to learn who not has decided yet
 [ce va vota t_i]]? (Romanian)
 what will vote
- b. Vidjah edna kniga, kojato_i se ?udja [koj znae [koj prodava t_i]]
 saw-1s a book which wonder-1s who knows who sells

また、以上のような対照性が主語と目的語のwh島からの取り出しに関しても観察される。

- (iii) a. *Who do you wonder whether can help?
 b. ??Who do you wonder whether we can help?

MLCに基づく分析ではこれらの対照性を説明することができない。しかし、Kitahara (1997)で議論されているように、上記のような対照性はMLCではなく、それぞれのLF表示に還元される可能性がある。つまり、文法性の著しい低下はMLC違反だけでなく、それに加えてLFで完全解釈の原理に抵触するからである。詳細はKitahara (1997: Ch.4)参照。

(Bulgarian)

(68) a. *Co on zapyta? [kto wynalaz? _]? (Polish)

what he asked who invented

b. *Šta si me pitao ko može da uradi? (Serbo-Croatia)

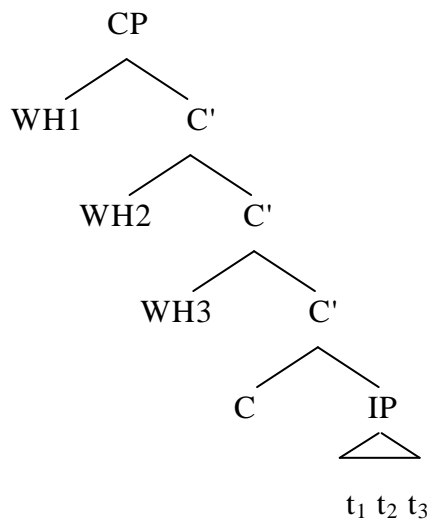
what have me asks who can to do

c. *Kdo se te ptal co delá? (Czech)

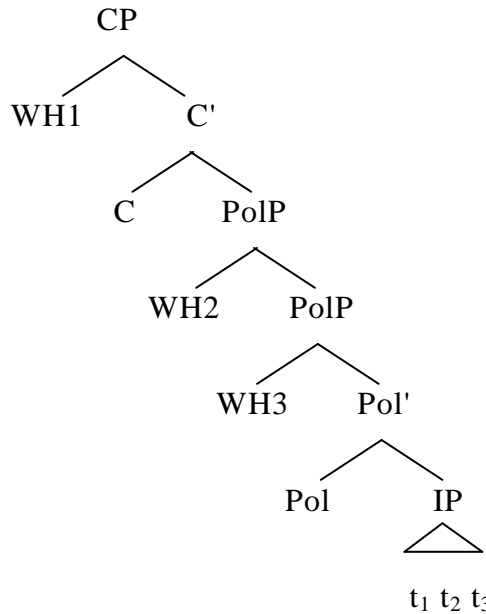
who have-3p you asked what does

ここでは、前節に引き続いて、ブルガリア語とルーマニア語を以後BR-タイプ言語と呼び、ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語を以後P-タイプ言語と呼ぶことにする。この二つのタイプにはさらに別の違いが観察され、(69)に示してあるように、BR-タイプ言語では、すべてのwh句はCPの指定部に移動し、一方、P-タイプ言語では、CPにはwh句が一つだけ収容でき、残りのすべてのwh句はIPとCPの間、つまりPolPの指定部に収容されるという違いがあった。

(69) a. [CP wh wh wh C [IP ...]] (BR-タイプ言語)



b. [CP wh C [PolP wh wh [IP ...]]] (P-タイプ言語)



つまり、二つのタイプの言語差異は、機能範疇が指定部をどれだけ持てるかということに収斂される。特に、wh句のwh島からの取り出しが可能か可能でないかは、CPの指定部の収容能力の相違であると考えられる。英語では、CPは多重指定部を持たないため、その指定部にwh句が入り、さらにそのCPの中からwh句を取り出すと、その移動がMLCに抵触するため認められなかった。ところが、wh島が時制節を含まない場合には、その文の投射の上限は、CPではなくCPとIPの間のPolPであり、この投射範疇は多重指定部を持つことができるため、wh移動でwh句がPolの一つの指定部に収容され、さらにwh移動がその補文から生じてても、Polのもう一つの指定部を経由できるので、そこがescape hatchになり、MLCに抵触しない。

このことに基づいて、BR-タイプ言語について考えてみよう。(70)は、BR-タイプ言語に関するwh島からの取り出しを表している。BR-タイプ言語では、前述のように、CPが多重指定部を持つことができるので、wh移動でwh句がCPの一つの指定部に収容され、さらにwh移動がそのCPから生じてても、CPの他の指定部を経由できるため、そこがescape hatchになり、MLCに抵触しない。従って、BR-タイプ言語では、wh島からの取り出しが容認されることになる。

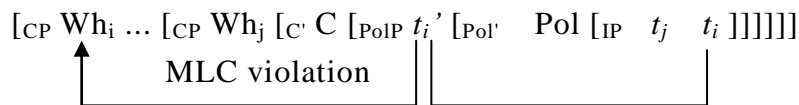
(70) BR-タイプ言語

Wh_i ... [wh_j [... [CP t_j' [C' t_i' [C' wh_k [C' C [IP t_i t_j t_k]]]]]]]]]

次に、P-タイプ言語について考えてみよう。(71)はP-タイプ言語の

wh島からの取り出しを表している。

(71) P-タイプ言語



P-タイプ言語では英語と同じく、CPは一つの指定部、またPolPは多重指定部を持っている。それで、wh移動でwh句がCPの一つの指定部に收容され、さらにwh移動がそのCPから生じると、その移動はCPを越える移動になり、MLCに抵触することになる。従って、P-タイプ言語では、wh島からの取り出しが容認されないということが分かる。

5. 結語

従来の分析では、EPP素性が対象とするのは指定部への顕在的な句移動だけであった。このEPP素性を主要部に対しても拡張することで、自然言語内の様々なwh疑問文のパターン、共時的・通時的差異、及びwh移動に伴う主要部移動に関わる言語差異を説明できることを述べてきた。¹¹ また、指定部を対象とした

¹¹ 査読者が指摘するように、left periphery 構造に関する研究が進展している中、CP Cartography の研究を踏まえた wh 移動の議論も必要となる。例えば、(i)のような CP の主要部に複数の性質を異にする補文標識が生起するような例や、(ii)のように同じ補文標識が2つに分裂して導入される例なども扱う必要が出てくる。

(i) Taro-ha [_{CP} [_{TP} Jiro-ga nani-wo katta] no-ka-to] tazuneta (*Japanese*)

Taro-Nom Jiro-Nom what-Acc bought C asked
'Taro asked what Jiro bought.'

(ii) Gioanin a spera che Ghitin che as nē vada tòst (*Turinese*)

John SCL hope-pre-3s that Margaret that SCL+rfl part go-S-3s soon
'John hopes that Margaret leaves soon.' (Paoli (2007: 1058))

(i)や(ii)の例などは、Rizzi (1997)が主張する CP と TP の間に存在する様々な機能範疇を仮定することで説明が可能であるように見える。例えば、(ii)のような例は、補文標識の che が補文に2カ所生起しているが、Paoli (2007)によると、上の che は、Rizzi (1997)が分析する ForceP の主要部に生起し、下の che は FinP の主要部にあり、補文主語はそれらの間にある TopP 又は FocP の指定部に生起するという。しかし、(i)のような例はオランダ語や West Flemish でも観察される question particle と補文標識が融合した例であり、それらが CP の C の位置に共存していると考えられる。また、(ii)のような例においても、上の che は CP の主要部にあり、下の che は TP の主要部に生起するとも考えられる。確かに、Rizzi (1997)の提案する

EPP素性は、複数指定されることが可能で、これを満たすために複数のwh句がその指定部に移動し、多重指定部を形成する。多重指定部を持つか否かは、wh島からのwh句の取り出しに密接に関連しており、多重指定部を許容する部位とMLCとの相互作用でその言語がwh島からのwh句の取り出しを許容するか否かが決まる。

子供が疑問文を習得する過程においては、特に主要部に関するEPP素性の指定が通時的変遷を受けやすい。疑問文形成の際の主要部移動（主語・助動詞倒置）の出没がその一例であった。標準英語においては、この主要部移動は主節のみに観察され、埋め込み疑問文では生起しない。しかし、英語の方言の中にはこうした非対称性はなく、どちらにおいても観察される。このように、主要部に対するEPP素性の指定は流動的である。歴史的に見ても同じことが当てはまる。ゲルマン系言語に観察されるV2現象は英語においても古英語期からあったが、15世紀の後半に衰退している（Kemenade (1987)参照）。現存しているのは、wh疑問文と否定辞移動に見られる倒置のみである。また、現在のフランス語に観察されるV-to-T移動に相当するものが、16世紀の後半にはほぼ消失している（Roberts (1993)参照）。動詞の移動は主要部から主要部への循環移動であり、それぞれの主要部のEPP素性を満たす形で移動していると考えられる。動詞の移動の消失は、移動経路の主要部に指定されるEPP素性の欠落と連動する。こうした、主要部に関するEPP素性の指定の通時的変遷の詳細とその原因については、さらなる調査、考察が必要となるが、今後の課題とし、稿を改めて議論することにする。

参考文献

Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (1998) “Parametrizing AGR: Word Order, Verb-movement and EPP-checking,” *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491-539.

機能範疇は言語間の多様性を説明する上で有効であるように思えるが、表示の経済性という観点から、新たな機能範疇を導入せずとも説明が可能であるなら、最小限の機能範疇で説明すべきである。上記の例などは、wh移動を含め補文標識の体系を説明する上で、考慮すべき事項であるが、詳細な議論は今後の課題としておく。

- Authier, J.-Marc (1992) "Iterated CPs and Embedded Topicalization," *Linguistic Inquiry* 23, 329-336.
- Baker, Carol Leroy (1970) "Notes on the Description of English Questions: the Role of an Abstract Question Morpheme," *Foundation of Language* 6, 197-219.
- Chen, Lisa Lai-Shen (1991) *On the Typology of WH-Questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Culicover, Peter (1991) "Topicalization, Inversion, and Complementizers in English," ms., The Ohio State University.
- Doherty, Cathal (1997) "Clauses without Complementizers: Finite IP-complementation in English," *The Linguistic Review* 14, 179-220.
- Doherty, Cathal (2000) *Clauses without "That": The Case for Bare Sentential Complementation in English*, Garland, New York and London.
- Epstein, Samuel David and Daniel T. Seely (2006) *Derivations in Minimalism*, Cambridge University Press.
- Erteschik, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.
- Grimshaw, Jane (1979) "Complement Selection and the Lexicon,"

- Linguistic Inquiry* 10, 279-326.
- Grimshaw, Jane (1993) "Minimal Projection, heads, and Optimality," ms., Rutgers University.
- Grimshaw, Jane (1997) "Projection, Heads, and Optimality," *Linguistic Inquiry* 28, 373-422.
- Haeberli, Eric (2003) "Categorial Features as the Source of EPP and Abstract Case Phenomena," *New Perspectives on Case Theory*, ed. by Ellen Brandner and Heike Zinsmeister, 89-126, CSLI, Stanford.
- Hagstrom, Paul (1998) *Decomposing Questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*, Oxford University Press, Oxford.
- Holmberg, Anders (2000) "Scandinavian Stylistic Fronting: How Any Category Can Become an Expletive," *Linguistic Inquiry* 31, 445-483.
- Inada Toshiaki (1997) "Interrogative Inversion in Embedded Clauses and Varieties of English," paper presented at the Fukuoka Linguistic Circles.
- Inada, Toshiaki and Noriko Terazu Imanishi (1997) "Complement Selection and Inversion in Embedded Clauses," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, ed. by Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shinji Chiba, 345-377, The Taishukan Publishing Company, Tokyo.
- Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kitahara, Hisatsugu (1997) *Elementary Operations and Optimal Derivations*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Koizumi, Masatosi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, Shige-Yuki (1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
- Landau, Idan (2007) "EPP Extensions," *Linguistic Inquiry* 38, 485-523.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α* , MIT Press, Cambridge, MA.
- Lightfoot, David (1989) "The Child's Trigger Experience: Degree-0 Learnability," *Behavioral and Brain Sciences* 12, 321-334.
- Lightfoot, David (1991) *How to Set Parameters*, MIT Press, Cambridge, MA.

- Manzini, Maria Rita (1992) *Locality: A Theory and Some of Its Empirical Consequences*, MIT Press, Cambridge, MA.
- McCloskey, James (1992) "Adjunction, Selection and Embedded Verb Second," Linguistic Research Report LRC-92-07, University of California, Santa Cruz.
- McCloskey, James (1996) "On the Scope of Verb-Movement in Irish," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 47-104.
- Miyagawa, Shigeru (2001) "The EPP, Scrambling, and *Wh*-in-Situ," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 293-338, MIT Press, Cambridge, MA.
- Paoli, Sandra (2007) "The Structure of the Left Periphery: COMPs and Subjects Evidence from Romance," *Lingua* 117, 1057-1079.
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David (2000) *Phrasal Movement and its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Radford, Andrew (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax: the Early Nature of Early Child Grammars of English*, Blackwell Publishers, Oxford.
- Radford, Andrew (1995) "Phrase Structure and Functional Categories," *The Handbook of Child Language*, ed. by Paul Fletcher and Brian MacWhinney, 483-507, Blackwell Publishers, Oxford.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax*, Cambridge University Press.
- Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.
- Rivero, Maria-Luisa (1994) "On the Indirect Questions, Commands, and Spanish Quotative *Que*," *Linguistic Inquiry* 25, 547-554.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.
- Roberts, Ian and Anna Roussou (2002) "The Extended Projection Principle as a Condition on the Tense Dependency," *Subjects, Expletives, and the EPP*, ed. by Peter Svenonius, 125-155, Oxford University Press.
- Roeper, Thomas (1990) "How a Marked Parameter is Chosen: Adverbs and

- Do-insertion in the IP of Child Grammar," Papers in the Acquisition of WH, University of Massachusetts Occasional Papers Special Edition, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 175-202.*
- Rudin, Catherine (1988) "On Multiple Questions and Multiple WH fronting," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Ura, Hiroyuki (1994) "Varieties of Raising and the Feature-Based Bare Phrase Structure Theory," MIT Occasional Papers in Linguistics 7.
- Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT.
- Watanabe, Akira (1992) "Subjacency and S-structure Movement of Wh-in-situ," *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373-410.
- Weinberg, Amy (1990) "Markedness Versus Maturation: The Case of Subject-Auxiliary Inversion," *Language Acquisition* 1, 165-194.
- Weverink, Meike (1991) "Inversion in the Embedded Clause," *Papers in the Acquisition of WH, University of Massachusetts Occasional Papers, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 19-42.*

EPP-feature and *Wh*-movement

Yoshihiro Munemasa

Fukuoka Institute of Technology

The Extended Projection Principle (EPP) essentially operates in the syntax. In Chomsky (2000, 2001), the EPP is modified as part of feature checking machinery and is treated as a feature requiring an overt element in the Spec position of a projection. In addition to this EPP-feature, this paper proposes a new type of EPP-feature. The EPP-feature requires an overt element in the head position of a functional projection. Focusing in particular on *wh*-interrogatives, this paper shows that the specification of the two types of EPP-feature provides a systematic account for the typology of *wh*-movement. Apparently, [+EPP] and [−EPP] features for Spec on interrogative C impose conflicting requirements on derivations in that the former triggers *wh*-movement and the latter blocks it. If, however, universal constraints are subject to [\pm EPP] specification by individual grammars, the different specification provides a theory of language typology. As an illustration of the systems generated with the difference, if EPP-feature for Spec is specified as [−EPP], it yields the systems with no *wh*-movement, which has always been a frequent analysis of so-called “*wh*-in-situ” in languages. When, on the other hand, EPP-feature for Spec is specified as [+EPP], it yields the systems that have overt *wh*-movement. The same reasoning holds for the case of (non-) overt realization of interrogative C. If EPP-feature for head in interrogative C is specified as [−EPP], it yields the systems with no overt C. When, on the other hand, EPP-feature for head on the C is specified as [+EPP], it yields the systems that have an overt interrogative C. The interaction of EPP-feature specification and the investigation of the structural difference between tensed islands and untensed islands can serve to provide a straightforward account of a set of puzzles concerning the distinctive patterns of *wh*-extraction from *wh*-islands in overt multiple *wh*-fronting languages.

(初稿受理日 2008年3月24日 最終稿受理日 2008年6月25日)